

## 大津京遺構の出現

飛鳥から近江へ都を移し、わずか5年で消えた近江大津宮は、長い間所在が分からず「幻の都」とされてきました。

大津市錦織2丁目で、東西南北に整然と並ぶ大型の掘立柱柱穴（内裏の南門跡と推定）が発見されたのは昭和49年のこと、JR湖西線の西大津駅近くの住宅密集地の中のことです。

昭和53年、この建物跡の続きで、東西150m、南北350mに及ぶ正殿・朝堂院西第一堂、倉庫などと推定される建物跡や柵跡、宮の中心となる内裏正殿の建物などが検出されました。さらに、内裏南門と宮の中心を囲う回廊部分も発見され、長い間謎だった幻の大津宮の位置が確定されたのです。

建物は同一方位で、東西に対照的に配置され、また瓦が発見されていないことから、全て板葺きか檜皮葺きだったようです。

この推定復元された大津宮中枢部の構造は、前期難波宮を一部変形・縮小した構造とみることもできます。

大津京が設けられた時代は湖岸線が500mぐらい西に寄っていました。現在の大津京駅や皇子山運動公園などは湖の中にあり、都（宮）は湖岸にほとんど接しており、琵琶湖を見下ろす高台に築かれたと考えられます。

近江遷都で大津京を築いたのは、7世紀後半の天智天皇ですが、なぜ飛鳥から遠く離れた琵琶湖岸に宮を築いたのか、それは663年に起こった我が国の百濟救援軍が、新羅・唐の水軍によって白村江で大敗を喫したことが原因といわれて



きました。近江遷都は白村江の敗戦から4年後のことですが、人々はこの遷都を喜ばず、風諫（遠まわしに諫めること）するものも少なくなく、昼夜を問わず出火があったといわれます。

なぜ近江遷都は強行されたのか、それには白村江の戦いがどのようなものだったのかを知らねばなりません。

## 白村江の戦い

当時の朝鮮半島は三国時代といわれ、新羅、百済、高句麗の大国が覇権を競いあっていた。倭国は百済とは同盟関係にあったが、百済は新羅に対抗するため高句麗と手を結び、倭国・百済・高句麗の新羅包囲網が形勢されることになる。

窮地に立った新羅は唐（3代目・高宗皇帝）に助けを求めた。建国以来、高句麗に何度も遠征しながら苦杯をなめていた唐は、絶好のチャンスと水陸13万の兵を出し、百済総攻撃を決行したのは、660年のことである。

百済最後の王は義慈王。「黄山筏（ファンサルゴル）の戦い」で勇名をはせた階伯<sup>けい</sup>大將軍など、百済はよく戦うが13万余を越える大軍には勝てず、義慈王は捕らえられ唐に連行されて病死する。ここに百済は滅亡するのである。

しかし、話はこれで終らない。百済は完全に平定されたわけではなく、奪われた王都・扶余城<sup>ふよじょう</sup>を奪還しようとする百済遺民の挙兵が相次いだ。

百済遺民を指揮したのは鬼室福信<sup>きしつふくしん</sup>、彼は倭国の来援を請い、倭国に居た百済王子の余豊璋<sup>よほうしょう</sup>の送還を頼んだ。豊璋を王として百済を再興しようとした。

事態の急激な展開に倭国の朝廷は愕然とした。時の天皇は斉明女帝で、その子の中大兄皇子が実際的な指導者だった。廟議は喧々轟々沸騰したが、ついに余豊璋を百済王に冊封<sup>さくほう</sup>して、兵五千をつけて送り出すことを決定、時に661年の正月6日、68歳の老女帝は自ら西征の途にのぼるのである。

余豊璋は倭国の兵とともに鬼室福信のもとに合流、倭国の救援軍を得た百済軍の士気は大いにあがった。百済遺民たちは唐・新羅の連合軍に占領された各地の城を襲撃、連合軍は危機に陥った。唐の高宗はただちに救援軍を派遣した

ところが不幸なことに百済復興軍に内紛が起こる。余豊璋は復興の旗手である鬼室福信を、王室内部の讒言<sup>ざんげん</sup>から死に追いやってしまう。豊璋王は百済全軍の指揮権を握り、百済と倭国軍5万の命運はこの愚昧な王に託されたのである。時に唐の水軍が迫り、白村江の大戦の幕が切って落とされようとしていた。

倭・百済の連合軍が、唐・新羅の連合軍に朝鮮南西部の白村江で激突したのは、663年のこと、唐の兵船は170隻に対して倭の兵船は400隻、しかし唐の船は、黄海横断用の船だけにおそらく城楼のようで、これに対して倭の船は木の葉のように小さな船であったに違いない。

戦いはほんの数時間で終わった。5万ともいわれる倭の兵士は、そのほとんどが海に沈み、生きて帰れたものは僅かの人数であったといわれる。



## なぜ、天智天皇は大津京に遷都したのか

白村江の敗戦からわずかに7日後に、百濟復興軍の拠点であった周留城するじょうが陥落、百濟は完全に滅亡します。そしてそれから4年後の667年、中大兄皇子は近江大津京への遷都を断行します。なぜ飛鳥の都から遠い近江なのか、唐の大軍に対する恐怖がその原因といわれますが、それは本当でしょうか。

事実、百濟滅亡後、福岡の大野城や佐賀の基肄きい城、さらに岡山の鬼ノ城や高安山の高安城が防御用の拠点として次々に築かれることとなります。これらの城を築いたのは亡命百濟の遺民たちでしょう。彼らは半島で行なった唐・新羅軍への抗戦を倭国でも想定して、朝鮮式の山城を建設していったのです。

しかしその恐怖は杞憂に終わります。高句麗を滅ぼすことが目的だった唐は、倭国まで攻めるつもりはなく、百濟に続いて高句麗を滅ぼし、韓半島で一國体制を築いた新羅は、唐に対して同じ立場の倭国に友好関係を求めてきたのです。

大津京が築かれた土地は、古代には「滋賀郡」と呼ばれ、南から北に古市にしごり・錦部にしごり・大友・真野の四郷からなり、真野郷を除いて、すべて6世紀ごろこの地域に居住し始めた渡来百濟人の開いた土地で、彼らの集住地でした。現代の石山から坂本あたりまでの土地で、古市郷は石山・南郷一帯で大友但波史族が居住、錦部にはにしごりすくね錦部村主を筆頭とする一族、そして三井寺の事実上の創始者の大友村主、さらには三津、滋賀里、南滋賀一帯を支配した三津首氏みつのおびと、穴太あ のうを名乗る一族、彼らは全て渡来系の氏族だったのです。

おそらく中大兄皇子がここを新都に選んだのは、ここが百濟人の土地だったからでしょう。百濟人の中には近江朝廷の高官についたものも沢山いました。亡命百濟遺民の多くもここに住みつきました。大津京は滅亡した百濟王国の亡命地でもあったのです。



なぜ、中大兄はこれほど百濟に加担したのか、日本書紀に気になる記事があります。

645年の「乙巳いっしの変」で蘇我入鹿が誅殺された時、それを見た古人皇子が「韓人からひと、鞍作臣くらつくりのおみを殺しつ、吾れ心痛し」と言ったのですが、この「韓人」とは同志の中臣鎌足のことだという説があります。鎌足は百濟遺民の末裔だといわれています。さらには、古人皇子が「韓人」と呼んだ人物を天智天皇その人と想像してみるの、あまりにも小説的な見方でしょうか。